

## 当院の長期間にわたる非結核性抗酸菌の分離状況と薬剤感受性の推移

◎鈴木 裕<sup>1)</sup>、須藤 真由<sup>1)</sup>、佐藤 美紀<sup>1)</sup>、五十嵐 純子<sup>1)</sup>  
山形県立中央病院<sup>1)</sup>

【はじめに】近年、非結核性抗酸菌（NTM）感染症の増加が著しく、世界的な問題となっている。今回、当院における過去14年間にわたるNTMの分離状況、および主要なNTMの薬剤感受性の推移について解析した。

【対象と方法】2010年1月から2023年10月の約14年間に当院患者検体12,155検体から分離されたNTMを対象とし、菌種同定結果と主要菌の薬剤感受性検査結果を収集して解析した。なお、同一患者から複数回菌が分離された場合は薬剤感受性試験を実施した最初の1株のみを計上した。培養同定・薬剤感受性検査は期間を通じて同一の外注検査会社に依頼した。同定は2010年から2019年3月まではTMA法とDDH法の組み合わせ、2019年4月からは質量分析法により実施された。薬剤感受性検査はブロスミックNTM（極東製薬）を用いて実施され、期間を便宜上2010～2014年、2015～2019年、2020～2023年の3つに分けて最小発育阻止濃度（MIC）の推移を解析した。統計解析はR version 4.3.1にてボンフェローニ補正を加えたウィルコクソンの順位和検定を用いて行い、 $p < 0.01$ を有意とした。

【結果】NTMは516株分離され、*Mycobacterium avium*が334株（64.2%）、*Mycobacterium intracellulare*が116株（22.3%）と多くを占めた。また、迅速発育菌群が43株（8.3%）分離された。年次推移は、2017年から2019年にかけて分離数が増加し、以降減少に転じた。分離数の多かった*M. avium*と*M. intracellulare*について薬剤感受性の推移を解析した結果、2020～2023年分離群は他群に比較して、クラリスロマイシンを含む複数の薬剤で高いMICを示す株が有意に多かった。

【考察】当院で分離されたNTMは*M. avium*が最多であり、我が国の傾向と一致していた。当院では2017年を境にNTMの分離数が増加しており、我が国のNTM感染症増加の波が2017年以降に山形県に波及した可能性が考えられた。本検討では2020年以降に分離された*M. avium*と*M. intracellulare*において複数の薬剤でMICの上昇を認めた。当地域で流行しているNTMの薬剤耐性化が進行している可能性があり、引き続き薬剤感受性の動向を注視していく必要がある。